保育士養成校で学ぶ社会人学生のキャリアと仕事に関する認識

田中眞希[1)]、宮上多加子[2)]

（2017年９月27日受付，2017年11月17日受理）

Perceptions of Career and Work among Working Adult Students Studying at Childcare Worker Training Schools

Maki TANAKA[1)], Takako MIYAUE[2)]

（Received：September 27. 2017，Accepted：November 17. 2017）

要　旨

本研究は，保育士養成校で学ぶ社会人学生の保育の学習や仕事についての認識，保育という職業や専門性に対する認識について明らかにすることを目的としている．対象者は，社会人経験を経た後に保育士養成校へ入学した社会人学生とした．

社会人学生15人に対して個別面接調査を実施し，データを質的帰納的に分析した．得られたコードは43，コードをまとめて生成したカテゴリーは11であった．

分析の結果，保育士養成校で学ぶ社会人学生は保育の学習について，自身の持つ社会経験を活用しつつ実践的に学び，保育士像や保育の仕事の信念を固めつつあった．保育の専門性については，子どもの発達と気持ちを重視する姿勢と認識していた．しかし，保育士の資格取得後のキャリアパスが未整備であることや，就労を続ける上での労働環境に多くの課題があることなども明らかになった．

キーワード：社会人学生，保育士，キャリア，職業経験

Abstract

The aim of this study was to clarify perceptions of working adult students studying at childcare worker training schools regarding childcare study and work, together with their perceptions of the nature of childcare and associated professionalism. Subjects were working adult students who had work experience as adults before entering childcare worker training schools.

Individual interviews were conducted with 15 working adult students, and data were analyzed using a qualitative inductive approach. A total of 43 codes were obtained and grouped to generate 11 categories.

Results of analysis showed that working adult students studying at childcare worker training schools learned practically while making use of their own experience in society as they studied childcare, and were in the process of consolidating their image of a childcare worker and beliefs about the work of childcare. Childcare professionalism was perceived to be an attitude of attaching importance to children's development and feelings. However, it was also clear that career paths after obtaining a childcare worker certification remained undeveloped, and there were many work environment issues to be resolved in order to continue work.

Keywords: working adult student, childcare worker, career, work experience

1)　高知県立大学社会福祉学部　助教　修士（社会福祉学）
Department of Social Welfare, Faculty of Social Welfare, University of Kochi, Teaching Associate (Master of Social Welfere)
2)　高知県立大学社会福祉学部　教授　博士（社会福祉学）
Department of Social Welfare, Faculty of Social Welfare, University of Kochi, Professor (Ph.D.)

Ⅰ　研究の背景

1．社会的背景

厚生労働省によると2014年に生まれた子どもの数は1,003,539人で，前年より26,227人減少し，５年連続で過去最低を記録している（厚生労働省 2016a）．出生率低下の主な原因は，晩婚化の進行等による未婚率の上昇が挙げられ，その背景には，仕事と子育ての両立や子育ての負担感の増大が挙げられている．厚生労働省は，これらの少子化対策として，安心して子育てができる環境整備を進め，次世代を担う子どもを社会全体の取組として支援するという基本的視点を打ち出している（厚生労働省 1999,2002,2009）．

また，1980年以降共働き世帯は年々増加し，1997年以降は共働き世帯数が男性雇用者と無業の妻からなる世帯数を上回った．さらに，2005年～2015年の10年間で，女性の就業率は全ての都道府県で上昇した（内閣府 2017）．核家族化や共働き世帯の増加など社会情勢の変化により，保育需要は年々増大し，さらに，延長保育，低年齢保育及び障害児保育など，保育ニーズが多様化している．また，保育所が利用できなかった待機児童数は21,371人（2014年４月現在）と，待機児童問題は深刻である（厚生労働省 2015a）．

一方で，保育士の有効求人倍率は2014年１月の全国平均が1.74倍で，保育分野における人材不足も課題である．また，2013年～2017年の間に，新たに保育士を69,000人確保する必要があると推計されており，厚生労働省は「保育士確保プラン」を策定し，今後の人材不足に対応している（厚生労働省 2015a）．

保育士資格を取得する方法は２つあり，１つは，保育士養成校の指定の単位を取得し卒業する方法である．もう１つは，保育士試験に合格する方法で，いずれの方法も都道府県に保育士として登録することにより資格が取得できる．保育士試験の合格率は，10～20%の間を推移している．保育士資格取得者の約８割が，保育士養成校で資格を取得している状況である．また，現在の保育士登録者数は1,312,231人で，保育士養成校は，大学が262箇所，短期大学は240箇所，専修学校が136箇所，その他３箇所の計641箇所であった（2015年４月１日現在）．

保育人材確保ための方策のひとつが，保育士修学資金貸付制度である．この貸付制度は，保育士養成校に在籍する者に，修学資金を貸し付けることにより修学を容易にし，質の高い保育士を養成することを目的としている．本貸付制度の実施主体は都道府県で，貸付期間は在学期間（２年間を限度としている），貸付額は月額50,000円，初回入学準備金として200,000円，卒業時就職準備金として200,000円以内を加算できる．利子は無利子で，養成校を卒業した日から１年以内に保育士登録を行い，修学資金の貸付を受けた都道府県で5年間当該業務に従事した場合，または中高年離職者（入学時に45歳以上のものであって離職して２年以内の者）においては同条件で３年間当該業務に従事した場合は返還の債務を免除される．

また，保育士養成校において「離職者訓練制度」を活用し２年間で保育士を目指す方法もある．これは離職者を対象としているため，社会人が再び学ぶ機会となるといえる．2013年度の訓練計画数は3,400人で，そのうち保育士が500人，介護福祉士が2,900人であった（厚生労働省 2013b）．

一方，保育士養成校の定員は2000年が31,396人，2010年が55,072人と，2000年以降の10年間で1.75倍に増加している．その後も定員は増加し，2014年は56,448人であった（一般社団法人全国保育士養成協議会 2014）．

筆者らは，離職者訓練等を活用し介護福祉士養成校で学ぶ社会人学生に対して聞き取り調査を行い，社会人学生のキャリアと仕事に関する認識について明らかにしてきた（宮上・河内 2012，宮上 2012，宮上・田中 2013，宮上・田中 2014）．それらの研究で，社会人学生は介護の理念や技術を学ぶことには抵抗感が少なく，学習や実習の中で自身の持つ社会経験や資質を活用しようとしていたことが明らかになった．

その後，准看護師養成校で学ぶ社会人学生に聞き取り調査を行った（田中・宮上 2015，宮上・田中 2016）．その結果，看護の仕事についての信念を固めつつ，将来のキャリアを描こうとしていることが明らかになった．

このように，福祉分野では，資格取得支援制度の充実により，社会人が再び学ぶ機会が増加していると捉えることができる．

２．保育士の労働環境

厚生労働省の「平成25年賃金構造基本統計調査」によると，保育士，介護福祉士，准看護師等の平均年齢，勤続年数，現金給与額は表１のとおりであった．

表１：保育士の平均年齢及び勤続年数，給与の他職種との比較

職種別	平均年齢（歳）	勤続年数（年）	現金給与額（千円）
全産業	42.0	11.9	324.0
保育士	34.7	7.6	213.2
福祉施設介護職員	38.7	5.5	218.9
介護福祉士	不明	5.7	234.9
准看護師	46.7	10.2	278.7
看護師	38.0	7.4	328.4

厚生労働省（2014a）より筆者作成

保育士は他の職種と比較し，年齢層が低い．また，介護福祉士や准看護師と比較し，現金給与額は低く，勤続年数は准看護師や全産業と比較すると短いことが分かった．

また，全国保育協議会の会員を対象とした実態調査（社会福祉法人全国保育協議会 2017）によると，非正規保育士・保育教諭及び保育補助者を配置している施設は，全体の91.6％であった．「施設種類別保育士・保育教諭の非正規割合」について，平均非正規割合は42.1％で，非正規割合は「20～40％未満」(23.4％)「40～60％未満」(20.9％)の順に高かった．

保育士資格を有するハローワーク求職者のうち，約半数は保育士としての就業を希望していない理由として，「責任の重さ・事故への不安」が最も高い．さらに，就業を希望しない理由で，職場の環境改善に関する項目としては，「賃金が希望と合わない」が最も多く，「休暇が少ない・休暇が取りにくい」が挙げられている．前述のとおり，保育分野の人材不足を解消するためには，処遇改善や勤務環境の改善に取り組む必要性が示されている（厚生労働省 2014b）．

これらのことから，保育士は年齢層及び給与が低く，職員が短期間で入れ替わっていると捉えることができる．また，非正規や期限付きの正規職員として雇用されているケースが多いことや，正規職員は時間外労働が多く，家庭との両立が難しいなど，労働環境に多くの課題があると考えられる．

３．保育士に関する先行研究の動向

保育士に関する研究動向について，国立情報学研究所の論文検索データベースであるCiNiiを用いて，過去10年間の論文のうち，「保育士」をキーワードとして検索したところヒット数は1,962件であった．また，同じく「保育士」「キャリア」をキーワードとして検索したところヒット数は32件であった（2017.9.6検索）．

その中で，神谷（2009）は，保育所と児童養護施設の職員にインタビュー調査を行い，採用したい保育士像や４年制大学における保育士養成に寄せる期待について明らかにした．それらの結果，採用したい保育士像では，子どもを好きなことが大前提であり，積極性や基本的な生活習慣を求めていた．４年制大学に寄せる期待では，２年間で学べないことがたくさん出てきたため特別なことを求めるというよりは，保育士として身につけるべき知識やスキルをきちんと身につけてほしいという指摘があった．

今井ら（2013）は，保育士・幼稚園教諭及び介

護福祉士として働く卒業生へのアンケート調査を実施した．就業継続を図るには，学生時代に人間関係を築く基礎となるコミュニケーション能力を高め，自己肯定感を持ち，職業観を養うことが課題となった．これらのことから，教育機関と福祉現場が連携し，就業継続支援に関する取り組みを行うことが課題であると述べている．

勝井（2016）は，福祉専門職としての保育士の価値・知識・技能を児童家庭福祉実践の場で経験し学ぶことは，キャリア教育としても大きな可能性を包含していると述べている．松尾（2017）は，保育士不足を解消するために，早期離職を防ぐためのキャリア教育に何が必要か考察し，キャリアプランニング能力に着目した．また，坪井（2017）は，学生にアンケート調査を実施し，職業選択で保育士を選んだ学生の20％がやりがいを感じておらず，職業に対するキャリア教育の重要性を述べている．

大森ら（2014）は，保護者が期待する保育の専門性に着目し，保育士のキャリアパスで考案された保育士の専門性との間には，構造化の差異が存在することが示唆された．現状の保護者の期待に応えるためには，専門性によるチームとしての援助することの必要性が明らかになった．さらに，大森・太田（2015）は，保育士のキャリアパスが保育士の専門性をどのように解釈しているかに着目した．アンケート調査の結果，保育士の専門性が分化される中で，現状の子どもの社会的擁護に応えるためには，保育所保育士の専門性と異なる施設保育士の専門性に関して構造化の必要性を示した．

以上のように，保育士養成校におけるキャリア教育やキャリアパスの構築，就業継続支援の重要性に関する研究は散見される．しかし，保育士養成校で学ぶ社会人学生の保育の学習や仕事，保育の専門性に対する認識について明らかにしたものは見られなかった．

Ⅱ　研究目的・方法

1．研究の目的

研究目的は，保育士養成校で学ぶ社会人学生の養成校における学びの内容や，保育という職業や専門性に対する認識について明らかにすることである．

2．研究方法

本研究は，保育士養成校で学ぶ社会人学生の立場から検討することを目的としていること，またこの研究テーマに関する先行研究が少なく，適切な理論や仮説が提示されていないことから，質的帰納的アプローチを用いた．具体的には，研究参加の同意を得られた対象者にインタビューガイドを用いた半構造化インタビューを個別面接にて実施した．そこで得られた内容から逐語録を作成し，質的分析ソフトMAXqdaを用いてコード化を行った．さらに，語られた内容と比較検討しながら，抽象化作業を進め，コードからカテゴリーを生成した．調査内容は，保育士養成校へ入学するまでの経験，保育士養成校での学習を経て感じたことや変化したこと，保育所や施設での実習を経て感じたことや変化したこと，保育の仕事についての価値観や職務上で大事にしたいと考えていること，卒業後の職業選択や資格取得に関する思いなどについてである．

質的調査方法におけるデータの厳密性を高め，分析結果をより確かなものにするために，確実性（credibility）を高めるための協力者への再確認（メンバーチェック）を行った．具体的にはカテゴリーを生成した時点で，調査対象者全員に対して結果を文書にて報告し，自身の経験に照らし合わせて納得できるかどうかについて参考意見を聴取し，分析結果は支持された．

3．対象者の選定と倫理的配慮

保育士養成校の教員に，本研究の目的・調査内容を説明し，調査実施の内諾を得た上で，調査対象者の条件を提示し，調査候補者の選定を依頼し

た．調査候補者に対して，研究者から研究内容と倫理的配慮についての説明を文書及び口頭で行い，協力の意思を確認した上で研究参加への同意書に署名を依頼し承諾を得た．なお，調査開始前には，本学の社会福祉研究個人情報保護・倫理審査委員会に申請し承認を得ている（第384号：2014年６月24日付）．

Ⅲ　結果

１．調査実施期間

2016年８月２日～2016年９月６日

２．調査対象者の属性

調査対象者は15人で，男性２人，女性13人であった．調査時点の年齢別では，20歳代11人，30歳代４人で，平均年齢は27.7歳であった．また，学年別では，１年生２人，２年生９人，３年課程の３年生４人であった．面接時間は43～61分で，平均約54分であった．詳細は表２のとおりである．

３．カテゴリーとコード

保育士のデータから生成されたコードは43，カテゴリーは11であった．カテゴリーとコードから読み取れる特徴として５つの局面に分類した（表３）．以下の文中では，局面を【　】，カテゴリーを『　』，コードを〈　〉，語りを《　》の記号を用いて表記する．

４．局面ごとのカテゴリーとコードの関係

（１）【越境して保育職を目指す】（表４）

この局面には『①入学するまでの課題』『②保育専門学校を目指した経緯』の２つのカテゴリーと６つのコードが含まれている．

入学のきっかけとしては，〈3 以前から子どもとかかわる仕事をしたかった〉と考えていた調査対象者が多く，〈4 保育の現場で資格の意義を実感〉したという人もいた．入学する前は，〈2 同級生との年齢差が気になっていた〉調査対象者は多く，〈1 知人や家族の理解と協力〉を得て〈5 学費を工面する努力〉をしつつ，〈6 社会人入試

表２　調査対象者

	性別	年齢	学年	学歴/職業暦	ケア経験・現場	介護関係資格	面接時間
A	女性	31	2	大卒／保育所栄養士・学習塾	栄養士／保育所	なし	60 分
B	女性	39	2	高卒／事務・パソコンインストラクター・保育所事務	なし	なし	57 分
C	女性	32	2	高卒／特養・有料老人ホーム	介護職	介護福祉士	51 分
D	女性	24	3	短大卒／営業職・保育所加配	加配保育士	なし	43 分
E	女性	29	3	高卒／パート・保育所加配	加配保育士	なし	55 分
F	女性	35	3	大卒／パート	ダンス講師／保育所	なし	57 分
G	女性	24	3	高卒／事務	なし	なし	45 分
H	男性	25	1	高卒／接客（ダイソー）	なし	なし	47 分
I	女性	28	1	高卒／劇団・保育所補助員	保育所補助員	なし	45 分
J	女性	26	2	大卒／障害児デイ・放課後	支援員／障害児	なし	53 分
K	女性	24	2	高卒／接客業（飲食店）	なし	なし	57 分
L	男性	26	2	専門学校卒／洋菓子・スイミングスクール	インストラクター／スイミング	なし	67 分
M	女性	24	2	高卒／販売員	なし	なし	50 分
N	女性	25	2	高卒（大学半年間）／医療事務・販売員	なし	なし	61 分
O	女性	24	2	高卒（大学２年半）／飲食店アルバイト	なし	なし	60 分

表３　保育士のキャリアと仕事に関する局面とカテゴリー

局　　面	カ　テ　ゴ　リ　ー
越境して保育職を目指す	① 入学するまでの課題
	② 保育専門学校を目指した経緯
保育を実践的に学んでいく	③ 社会人としての経験の価値
	④ 保育士として身につけたい知識や技術
学ぶ経験を通して自分の保育士像を創る	⑤ 保育士としての子どもとの関係を再認識
	⑥ 保育士としての力量を向上させたい
保育についての仕事の信念を持つ	⑦ 子どもの発達と気持ちを重視する姿勢
	⑧ 保育士としての立場と役割を再認識
	⑨ 地域とのつながりを意識化する
保育士としてのキャリアパスを検討	⑩ 継続的に働く場としての条件
	⑪ 保育所以外の職場を視野に入れる

を活用〉して進学していた.

調査対象者は20歳代が多く，その他も30歳代であるが，やはり社会人から再び学生となることに多少の抵抗を感じていた．一方で，保育士資格の必要性を感じ，さらに，以前からの希望を実現するため，覚悟を持って保育士養成校への入学を果たしていた.

（２）【保育を実践的に学んでいく】（表５）

この局面には『③社会人としての経験の価値』『④保育士として身につけたい知識や技術』の２つのカテゴリーと12のコードが含まれている.

〈７ 職業経験や観察力などが役立つ〉〈８ 経験をもとに意欲的に学ぶ〉との認識のもと，社会人学生として教員や実習担当者，学友との関係を築くなど，10代の学生とは異なる〈10 社会人としてのマナーや関係性の自覚〉が明確になった.

また，『④保育士として身につけたい知識や技術』の内容は〈11 保育の基本や原理を理解したい〉〈14 子どもの個別的な課題に対応できるようになりたい〉〈15 発達障害児の保育についてもっと学びたい〉〈17 人間関係をつくるスキルを身につけたい〉など多様であった．その中でも，〈12 保育に必要なさまざまな実践的技術を身につけたい〉〈13 ピアノを弾く技術は必須〉は多くの調査対象者からデータが得られた．さらに，《ピアノをもう少し上手にひけるようになりたい》《（身につけたいことは）ピアノ，手遊び》《ピアノは苦労しましたね》《ピアノをしっかり弾けるようになりたい》など，ピアノを弾く技術の必要性は多くの学生が語っていた.

これらのことから，学ぶ意欲を持って，社会人

表４　【越境して保育職を目指す】に属するコードとカテゴリー

局面	カテゴリー	No	コード	実人数
越境して保育職を目指す	①入学するまでの課題	1	知人や家族の理解と協力	10
		2	同級生との年齢差が気になっていた	11
	②保育専門学校を目指した経緯	3	以前から子どもとかかわる仕事をしたかった	13
		4	保育の現場で資格の意義を実感	5
		5	学費を工面する努力	9
		6	社会人入試を活用	3

表５　【保育を実践的に学んでいく】に属するコードとカテゴリー

局面	カテゴリー	No	コード	実人数
保育を実践的に学んでいく	③社会人としての経験の価値	7	職業経験や観察力などが役立つ	7
		8	経験をもとに意欲的に学ぶ	9
		9	子育て経験や体験が子どもの理解に役立つ	4
		10	社会人としてのマナーや関係性の自覚	9
	④保育士として身につけたい知識や技術	11	保育の基本や原理を理解したい	3
		12	保育に必要なさまざまな実践的技術を身につけたい	8
		13	ピアノを弾く技術は必須	11
		14	子どもの個別的な課題に対応できるようになりたい	3
		15	発達障害児の保育についてもっと学びたい	2
		16	学ぶことが多いので全部できるのかと不安	3
		17	記録を効率的にできるようになりたい	3
		18	人間関係をつくるスキルを身につけたい	3

としての経験を活用しながら，保育を実践するために必要だと感じる知識や技術の習得に取り組む様子が伺えた．

（３）【学ぶ経験を通して自分の保育士像を創る】（表６）

この局面には『⑤保育士としての子どもとの関係を再認識』『⑥保育士としての力量を向上させたい』の２つのカテゴリーと10のコードが含まれている．

実習等を通して〈19 相手との関わり方について改めて考える〉や〈20 実習で自分の立ち位置と役割を自覚する〉など，『⑤保育士としての子どもとの関係を再認識』していく経験が多くあることが分かった．具体的に，保育士として必要な姿勢は，〈22 子どもの発達に合わせて保育を考える〉ことであり，同時に，保育者として〈21 子育てや遊びとは違う専門的な知識と技術が必要〉であるとの認識であった．

これらのことから，保育士としての子どもとの関係の大切さや専門的な知識と技術の必要性についてなど，保育士養成校で学んだことを実習体験で再認識していた．このことが，『⑥保育士としての力量を向上させたい』という意欲へとつながっていると考えられた．

また，調査対象者は，学校や保育の現場での学びの中で，〈27 自分の適性について再考〉しながら，自分なりの保育士像を創っていく様子が伺えた．

（４）【保育について仕事の信念を持つ】（表７）

この局面には『⑦子どもの発達と気持ちを重視する姿勢』『⑧保育士としての立場と役割を再認識』『⑨地域とのつながりを意識化する』の３つのカテゴリーと９のコードが含まれている．

子どもと向き合う際に，〈29 子どもと関わり気持ちに共感する姿勢が重要〉という考えは多くの調査対象者が語っており，〈31 新鮮な気持ちと笑顔で子どもに接する〉という具体的な姿勢も明らかになった．同時に，保育者として〈30 子どもの発達を促す保育を目指す〉のように『⑦子どもの発達と気持ちを重視する姿勢』を大切にしていることが示された．

また，〈32 実習で保育の仕事のイメージが広

表６　【学ぶ経験を通して自分の保育士像を創る】に属するコードとカテゴリー

局面	カテゴリー	No	コード	実人数
学ぶ経験を通して自分の保育士像を創る	⑤保育士として子どもとの関係を再認識	19	相手との関わり方について改めて考える	5
		20	実習で自分の立ち位置と役割を自覚する	6
		21	子育てや遊びとは違う専門的な知識と技術が必要	6
		22	子どもの発達に合わせて保育を考える	5
		23	障害のとらえ方に対する認識の変化	4
	⑥保育士としての力量を向上させたい	24	人前で表現する抵抗感を乗り越える	5
		25	学んだことが保育現場の仕事にすぐ活用できる	4
		26	現場で経験しないと分からないことがある	1
		27	自分の適性について再考する	2
		28	保育士としての責任感を感じ出した	4

表７　【保育についての仕事の信念を持つ】に属するコードとカテゴリー

局面	カテゴリー	No	コード	実人数
保育について仕事の信念を持つ	⑦子どもの発達と気持ちを重視する姿勢	29	子どもと関わり気持ちに共感する姿勢が重要	11
		30	子どもの発達を促す保育を目指す	5
		31	新鮮な気持ちと笑顔で子どもに接する	3
	⑧保育士としての立場と役割を再認識	32	実習で保育の仕事のイメージが広がった	5
		33	現場の保育士の姿勢や価値観が理解できるようになる	4
		34	モデルとなる保育士像がはっきりした	3
		35	学習した内容を所属の職場に伝える役目	1
	⑨地域とのつながりを意識化する	36	保護者への支援や信頼関係も重要	4
		37	保育についての情報を地域に発信する役目	1

がった〉のように，保育を行う上で大事にしたいことは子どもの発達と気持ちであるが，そのためには，保護者との信頼関係や地域住民とのかかわりも重要であるとの認識が明らかになった．

これらは，学ぶことによって『⑧保育士としての立場と役割を再認識』し，『⑨地域とのつながりを意識化する』ことにつながっていると考えられた．

（５）【保育士としてのキャリアパスを検討】（表８）

この局面には，『⑩継続的に働く場としての条件』『⑪保育所以外の職場を視野に入れる』の２つのカテゴリーと６のコードが含まれている．

〈38 私立の保育所は給与が低い〉〈39 正規保育士の職務と家庭の両立が困難〉のように，保育士の待遇には課題があると感じていることが示された．一方で，入学前に経験してきた職種と比較し，資格をもって働くことの価値を感じており，〈41 継続できる職種としての保育士〉との認識をもっていることが分かった．これは，職場環境に課題があるものの，保育士の需要の高さが影響していると考えられた．

表８　【保育士としてのキャリアパスを検討】に属するコードとカテゴリー

局面	カテゴリー	No	コード	実人数
保育士としてのキャリアパスを検討	⑩継続的に働く場としての条件	38	私立の保育所は給与が低い	4
		39	正規保育士の職務と家庭との両立が困難	4
		40	職員構成で中間層が少ない	2
		41	継続できる職種としての保育士	10
	⑪保育所以外の職場を視野に入れる	42	幼稚園は教育的要素が大きい	5
		43	社会福祉の分野も視野に入れる	3

また，幼稚園や福祉関係施設といった保育所以外の場を就職先として希望している人もいたが，子ども達の支援や支援が必要な人に対する仕事をしたいという点では共通していた．

Ⅳ　考察

前述のように，筆者らは介護福祉士養成校の社会人学生及び准看護師養成校の社会人学生への調査を実施し，学習や仕事に関する認識を明らかにしてきた（宮上・河内 2012，宮上 2012，宮上・田中 2013，宮上・田中 2014，田中・宮上 2015，宮上・田中 2016）．以下は，それらの研究結果と比較し，保育士養成校の社会人学生の養成校における学びの内容や，保育という職業や専門性に対する認識について考察する．

１．養成校入学への思い

保育士養成校の社会人学生は（以下，保育士学生），入学のきっかけとして〈3 以前から子どもとかかわる仕事をしたかった〉者が多かった．准看護師養成校の社会人学生（以下，准看護師学生）も同様に，もともと看護師を目指す気持ちがあり看護へ転職を考えたとの結果であり，それに加えて，職場の同僚や家族などが看護職を目指すことに対し応援するなど，周囲の後押しがあった（田中・宮上 2015）．また，独身女性が経済的自立を考えた際に選択するなど，看護の仕事の待遇のよさが転職に影響していることが示唆された（宮上・田中 2016）．

一方，介護福祉士養成校の社会人学生（以下，介護福祉士学生）は「離職者訓練制度」を利用し入学したためか，介護の仕事に関心がなかった者も含まれ，仕事を探しているときにタイミングよく制度を紹介されたことが入学へのきっかけとなっていた（宮上 2012，宮上・田中 2013）．

また，保育士学生の『①入学するまでの課題』として，〈1 知人や家族の理解と協力〉なしでは難しく，再び学生となることへの抵抗感を感じていた．介護福祉士学生も，入学前に躊躇や葛藤があったが，周囲の協力があって入学へ踏み切っていた（宮上 2012，宮上・田中 2013）．准看護師学生も，養成校入学への葛藤や不安があった（田中・宮上 2015.宮上・田中 2016）．

これらのことから，保育士学生は以前から興味があった保育士を目指そうと思いつつも，准看護師学生や介護福祉士学生と同様に養成校への入学には抵抗感があることが分かった．また，介護福祉士学生の制度利用や准看護師学生の周囲の後押しがあったことと比較すると，保育士学生は本人の主体的な決断が必要であったといえる．そのため，養成校への入学は，周囲の理解と協力なくしては決断できなかったことが分かった．

２．社会人としての経験の価値

保育士学生は，〈8 経験をもとに意欲的に学ぶ〉など，学ぶことへの意欲に経験が活かされていると認識していた．また，〈9 子育て経験や体験が子どもの理解に役立つ〉〈10 社会人としてもマナーや関係性の自覚〉など，経験を活かし保育を実践的に学んでいることが分かった．

介護福祉士学生においても同様に，社会人の持つ強みをコミュニケーション力などと認識し，社会人としての経験を介護の学びに活かしていた（宮上 2012，宮上･田中 2013）．

一方，准看護師学生では，社会経験が役立つことはあまりなく，新しいことを一から学ぶというイメージを持っていた（田中・宮上 2015.宮上・田中 2016）．

これらのことは，保育が介護と同様，対象者の生活に密接にかかわる仕事であり，専門職として対象をとらえた際に，看護の仕事と異なり，社会人としての経験を活かすことができる分野であることが示された．つまり，保育士学生は，保育の仕事をする上で，社会人としての経験は価値があると認識していることが明らかになった．

また，保護者のニーズへの対応や地域との連携など，多様な保育ニーズに対応するためにも，社会人経験が活用できると考えられる．

３．保育士として身につけたい知識や技術

保育士学生は，〈12 保育に必要なさまざまな実践的技術を身につけたい〉ことが明らかになり，特に，〈13 ピアノを弾く技術は必須〉との認識は多くの語りが得られた．准看護師学生においても，「手技」というキーワードが多く語られ，看護技術を確実に身につける必要性を感じていた（田中・宮上 2015.宮上・田中 2016）．一方，介護福祉士学生では，技術や手技に関する語りは少なく，対人援助職としての基本的な姿勢を学ぶことを重視していることが伺えた（宮上 2012，宮上・田中 2013）．

また，『⑤保育士として子どもとの関係を再認識』『⑦子どもの発達と気持ちを重視する姿勢』のように，保育士学生は対象者である子どもを中心に支援する姿勢が明らかになった．具体的には，〈29 子どもとかかわり気持ちに共感する姿勢が重要〉との語りは多くのデータが得られた．介護福祉士学生においても，前述のように対人援助職としての基本的な姿勢を学ぶことを重視していることが伺えた．

一方，准看護師学生は，看護の現場が業務に負われており患者により添えていない現状をみて，看護の仕事への複雑な思いを経験しつつ看護師としての意識と動き方を実感していた（田中・宮上 2015.宮上・田中 2016）．

これらのことから，保育士学生は子どもを中心に発達を支援する姿勢が明らかになった．また，保育に必要な技術の中でも，特にピアノの技術を強く意識していた．その点が保育士学生の特徴であるといえる．

４．仕事の信念

保育士学生は，〈29 子どもとかかわり気持ちに共感する姿勢が重要〉と認識し，〈30 子どもの発達を促す保育を目指し〉〈31 新鮮な気持ちと笑顔で子どもに接する〉など，『⑦子どもの発達と気持ちを重視する姿勢』が見られた．そのような中で，『⑧保育士としての立場と役割を再認識』し，『⑨地域とのつながりを意識化する』という，【保育についての仕事の信念を持つ】ていた．

介護福祉士学生への調査では，利用者の尊厳を守るため利用者の立場に立って考え，支援することを重要視していることが明らかになった（宮上・田中 2015）．また，准看護師学生への調査では，看護師として知識や技術を確実に身につけた上で業務をこなすことが重要であると認識していた（田中・宮上 2015.宮上・田中 2016）．

２者と比較し保育士学生は，対象者である子ども一人ひとりの発達と気持ちを尊重し，専門的知識と技術をもって接したいと考えていた．そのためには保護者への支援や関係，地域との連携及び地域に向けた発信者としての役割をも認識していた．これらのことから，保育士学生は，教育的視点をもって子どもの成長を支援していると捉えることができ，その点が特徴的であった．

５．保育士としての働き方

准看護師学生は，待遇面から看護職を目指した

ことからも分かるように，待遇面は安定している（田中・宮上 2015.宮上・田中 2016）．一方で，介護福祉士学生においては，介護職の給与面での課題を感じつつも，資格を取得する意味や介護人材としての自身の価値を早期に意識していた（宮上 2012，宮上・田中 2013，宮上・田中 2015）．

保育士学生は，〈38 私立の保育所は給料が低い〉〈39 正規保育士の職務と課程の両立が困難〉のように，保育士の待遇の不安定さを感じていた．しかし，〈41 継続してできる職種としての保育士〉のように，保育士資格を取得する意義も感じていることが分かった．

これらのことは，介護福祉士学生と類似の結果であった．近年の保育人材不足の影響で，保育士需要は高い．そのため保育士学生自身も，待遇面に課題はあるものの，保育士資格取得の意義を認識していることが明らかになった．

また，保育士学生の就職やキャリアについて，〈42 幼稚園は教育的要素が大きい〉〈43 社会福祉の分野も視野に入れる〉など，どのような場所で働くかについての語りはあった．しかし，働きながらステップアップや保育士としてのキャリアについての具体的な語りはほとんどなかった．

一方，介護福祉士学生は，将来取りたい資格として，社会福祉士や精神保健福祉士，介護支援専門員を挙げていた（宮上・田中 2013）．また，介護現場のリーダーを目指すなど，資格取得やステップアップに関する具体的な語りがあった（宮上 2012）．准看護師学生においても，養成校卒業後進学して看護師資格を取得したい，看護現場で経験を積みたいなど，資格取得やステップアップについての語りがあった（田中・宮上 2015.宮上・田中 2016）．

また，小原が述べているように，保育所や幼稚園，あるいは認定子ども園は職員数が少なく，園長や主任保育士等の役職が限られている．そのため，保育士の仕事の経験を通じて，初任，中堅といったキャリアアップの構造を示すことが困難といった課題がある（石川ら 2015）．本研究においても，保育士学生は介護福祉士学生及び准看護師学生と比較し，保育士のステップアップやキャリアに関するモデルが見えにくいという課題が明らかになった．

近年，保育士の研修体系等の定着に向けて，保育士のキャリアパスにかかわる研修体系等の構築に関する研究事業が行われている（厚生労働省 2016b）．これらが早急に具体化され，運用されることを期待する．

なお，本研究はJSPS 科研費 26381139の助成を受けて実施した調査の一部である．

文献

石川昭義･小原敏郎編（2015）『保育者のためのキャリア形成論』株式会社建帛社．

今井順子ら（2013）「卒業生への就業継続支援に関する調査研究」『植草学園短期大学紀要』14，21－25．

一般社団法人全国保育士養成協議会（2014）『年度別指定保育士養成校の入学定員の推移（参考）』（http: //www.hoyokyo.or.jp/nursing_hyk/study/sankou.pdf.2017.8.29）

勝井陽子（2016）「保育士養成課程におけるキャリア教育･職業教育に関する考察」『北翔大学短期大学部研究紀要』54，29－39．

神谷哲司（2008）「本学保育士養成課程のおける学生の初期キャリア形成に資するカリキュラムの検討」『鳥取大学地域学部論集』5(2)，141－156．

厚生労働省（1999）「少子化対策推進基本方針について 少子化対策推進基本方針」（http: //www1.mhlw.go.jp/topics/syousika/tp0816-2_18.html.2017.8.29）

厚生労働省（2002）「少子化対策プラスワン－少子対策の一層の充実に関する提案－」（http://www.mhlw.go.jp/houdou/2002/09/dl/h0920-1b.pdf.2017.9.19）

厚生労働省（2009）「社会保障審議会少子化対策特別部会 第１時報告－次世代育成支援のための新たな制度体系の設計に向けて－」

（http://www.mhlw.go.jp/shingi /2009/02/dl/s0224-9c.pdf.2017.9.19）
厚生労働省（2010）「保育士養成課程等の改正について（中間まとめ）」（http://www.mhlw.go.jp/shingi/2010/ 03/dl/s0324-6a.pdf.2017.9.1）
厚生労働省（2013a）「保育を支える保育士の確保に向けた総合的取組」（http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11907000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Hoikuka/0000026218.pdf.2017.9.1）
厚生労働省（2013b）「全国厚生労働関係部局長会議　平成25年２月19日（火）職業能力開発局」（http://www.mhlw.go.jp/topics/2013/02/dl/tp0221-04-01.pdf.2017.9.5）
厚生労働省（2013ｃ）「厚生労働省発雇児0226第４号平成25年２月26日『保育士修学資金貸付制度実施要綱』」（http: //www.zenshihoren.or.jp/wp/wp-content/uploads/2013/03/e0da981dc3c3c3602e575298c13f7c78.pdf2017.9.1）
厚生労働省（2014a）「第１回福祉人材確保対策検討会（H26.6.4）資料２『介護人材の確保について』」（http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12201000Shakaiengokyokushougaihokenfukushibu-Kikakuka/0000047617.pdf）2017.9.6）
厚生労働省（2014b）「保育人材確保のための『魅力ある職場づくり』に向けて」（http: //www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11601000-Shokugyouanteikyoku-Somuka/0000057898.pdf.2017.9.1）
厚生労働省（2015a）「『保育士確保プラン』の公表」（http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11907000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Hoikuka/ 0000070942.pdf.2017.8.29）
厚生労働省（2015b）「子ども・子育て支援新制度及び待機児童解消加速プランについて」（http://www.mlit.go.jp/common/001083367.pdf. 2017. 8.28）
厚生労働省（2015ｃ）「保育士修学資金の貸付について」（http://www.zenshihoren.or.jp/wp/wp-content/uploads/2013/03/e0da981dc3c3c3602e575298c13f7c78.pdf.2017.9.5）
厚生労働省（2016a）「平成27年度人口動態統計（確定数）の概況」（http: //www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei15/.2017.9.4）
厚生労働省（2016b）「保育士のキャリアパスに係る研修体系等の構築に関する調査研究事業」（http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000154083.html.2017.9.4）
厚生労働省（2016c）「『保育分野における人材不足の現状①』職業安定局」（http: //www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11600000-Shokugyouanteikyoku/0000057759.pdf.2017.9.6）
厚生労働省（2017）『保育士の処遇改善案』（http://www.mhlw.go.jp/file/06- Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000146788.pdf.2017.8.29）
国税庁（2015）「平成26年度分民間給与実態統計調査結果について」（http: //www.nta.go.jp/kohyo/press/press/2015/minkan/. 2017. 8.28）
松尾由美（2017）「保育士の早期離職を防ぐためのキャリア教育－キャリアプランニング能力の育成を目的とする問題解決シュミレーションゲームの提案－」『江戸川大学の情報教育と環境』14, 3－31.
宮上多加子（2012）「離職者を対象とした介護福祉士養成教育における社会人学生の認識－学びの経験に関する個別面接調査に基づく分析－」『介護福祉教育』17（2），98-106.
宮上多加子・河内康文（2012）「離職者を対象とした介護福祉士養成事業における社会人学生の経験－離職者訓練生と介護雇用プログラム生の比

較－」『中国・四国社会福祉研究』1，22-32.
宮上多加子・田中眞希（2013）「介護福祉士養成教育における社会人学生の学びのプロセス－離職者訓練生と介護雇用プログラム生の学年による変化」『中国・四国社会福祉研究』2，13-29.
宮上多加子・田中眞希(2014)「離職者を対象とした介護福祉士養成事業修了生の介護に対する認識と仕事の信念」『高知県立大学紀要社会福祉学部編』63，153-163.
宮上多加子・田中眞希(2015)「介護雇用プログラム生の学びと仕事に対する思い―面接調査による３年間の変化の分析―」『高知県立大学紀要社会福祉学部編』64，1-16.
宮上多加子，田中眞希（2016)『准看護学校における社会人学生の仕事に対する思い－介護職経験者の学習プロセスの分析から－』『高知県立大学紀要社会福祉学部編』65，pp1－12.
内閣府（2017)「平成28年度男女共同参画社会の形成の状況及び平成29年度男女共同参画社会の形成の促進施策(平成29年度版男女共同参画白書)概要」
(http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h29/gaiyou/pdf/h29_gaiyou.pdf.2017.9.4)
大森弘子･太田仁・水谷弘正（2014）「保護者が期待する保育士の専門性：保育士のキャリアパスを通して」『佛教大学社会福祉学論集』10，1－10.
大森弘子･太田仁（2015）「社会的養護を果たす保育士の役割と認知と効力不安について」『佛教大学社会福祉学論集』11,1-10.
西郷泰之･宮島清（2015）『人目で分かる基本保育データブック2016』中央法規出版.
佐藤郁哉(2008)『質的データ分析法　原理･方法･実践』新曜社.
社会福祉法人日本保育協会（2015)「保育士のキャリアパスに関する調査研究報告書」
(http: //www.nippo.or.jp/research/pdfs/2014_01/2014_01.pdf.2017.9.1)
社会福祉法人全国保育協議会（2017)「全国保育協議会会員の実態調査報告書2016」
(http://zenhokyo.gr.jp/cyousa/201706.pdf.2017.9.6)
田中眞希・宮上多加子(2015)「准看護学校で学ぶ社会人の学習や仕事に関する認識と職業経験の影響」『高知県立大学紀要社会福祉学部編』64，61-72.
坪井敏純（2017)「キャリア形成に及ぼす保育実習体験と就職支援の課題」『鹿児島女子短期大学紀要』52，97－102.
全国保育団体連絡会／保育研究所（2015)『保育白書2015年版』ひとなる書房.